

校長室だより～和光高校今昔 第34号 H26.12.26

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

ラグビー大会

この季節になると思い出されるのがラグビー大会である。家庭科の男女共修が始まる以前、秋から冬にかけての男子体育はラグビー一色（もちろんそうでない時間はBコース）。その集大成が全クラス総当たりのラグビー大会なのだ。学校指定の体育着がTシャツに加え男子はラグジャーだったことの意味がやっと解る。血沸き肉躍る戦いが繰り広げられるのだ。そしてここに教員チームが加わる。この時期の和光高校はラグビー部全盛期。どのクラスにも1～5名程の部員がいる。県トップクラスの名選手ばかりだ。さらにやはり同じくらいの割合で運動部の猛者たちが加わる。3年対1年の試合などキャリアの差は歴然だがまずもって目で制圧される。体育会とツッパリの世界は年功序列なのだ。そして日頃の鬱憤のターゲットとなるのが教員チームだ。



1年目は正直緊張した。しかしその昭和55年の教員チームは強烈だった！まず1列目は関根一・小原・滝本と並ぶ。両プロップは100kg級、フッカーの小原先生はほとんどのボールを奪取。そしてナンバー8が仲尾先生。これが強い。顔も怖い。ラグビー部以外は仲尾先生の突進を止められない。極めつけがスタンドオフの芳野さん。和光ラグビー部1期生、2年前には日体大で大学日本一の立役者。テレビで見たキックが炸裂する。ちなみにこの直後に教員からトップリーグ選手に、トヨタ自工の一員として日本一を新日鉄釜石の松尾雄治などと競うことになる。バックスの中心はサッカーの国際主審浜名先生。独特のステップで飄々と相手陣内へ切れ込む。そしてディフェンスはフルバックに往年の関東学生代表吉田道行先生が待ち構える。100kg超のカナダ学生代表FWを裏返した伝説のタックルが炸裂。ラグビー部の精鋭たちもこの砦は抜くことができない。苦し紛れの相手キックをキャッチすればカウンター。一線級のステップで埼玉随一のラグビー部員のタックルを難なくかわす。このスーパーチームのスクラムハーフが私。格好つけたダイブパスが相手タックルの餌食に。鎖骨骨折の勲章を得た。

さて、教員チームは無敗のまま準決勝あたりで棄権する。もしかしたら吉田先生も体力の限界だったのかもしれないが今となっては知る由もない。

昭和57年度でラグビー大会は幕を閉じたが、教師も生徒もパワー有り余る時代の元気な和光高校を象徴する行事だった。